

# 幼児期における親子の身体接触に関する年齢間比較 —身体接触場面と方法に着目して—

鎌田 桃代\* 新井 美保子\*\*

\* 卒業生

\*\* 幼児教育講座

## Comparison of Age on Physical Contact of Parents and Children in Early Childhood: Focusing on Situation and Method of Physical Contact

Momoyo KAMADA\* and Mihoko ARAI\*\*

*\*Graduate, Aichi University of Education*

*\*\*Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### I. 目的

これまでの研究から、乳児期における親子の身体接触の大切さや、保護者から幼少期に受けた身体接触が将来の性格や人間関係にまで影響することが明らかにされている。例えば、Harlow<sup>1)</sup>はアカゲザルの赤ん坊の実験より、乳児が母親との身体接触を強烈に求めていることや接触慰撫が母子の愛情形成における主要因の一つになっていることを示している。篠沢<sup>2)</sup>も、ベビーマッサージ、いわゆる身体接触をすることは、親子のふれあいとなりきずなを深めることができることを示している。また、山口は幼少期を対象に研究を行い、乳幼児期における保護者からの身体接触が子どものその後の攻撃性<sup>3)</sup>や心の健康<sup>4)</sup>、自尊感情<sup>5)</sup>などに関係していることを指摘している。

その一方で、保護者や保育者との身体接触は次第に減少することが明らかになっている。例えば、鈴木・春木<sup>6)</sup>は大学生を対象に自身の経験を振り返る調査を行い、幼稚園まで、小学校1～3年生まで、小学校4年生から6年生まで、中学校時代、高校時代、現在の6段階において段階が上がると共に親子の身体接触が減少することを明らかにしている。また、阿部・秦野<sup>7)</sup>は、保育現場における身体接触について4歳児よりも2歳児の方が保育者に対する身体接触が多いことを明らかにし、藤田<sup>8)</sup>も年長児は大人との身体接触が減少し、友達との身体接触が増加するとしている。

このように幼児期を境に保護者や保育者との身体接触は減少するとされているが、保護者自身はどのよう

に捉えているのだろうか。子育て中の保護者を対象に調査を行い、子育てに用いられる身体接触の実態を明らかにしている調査は見られないため、幼児期に家庭で実際にどのような身体接触が行われているのか、また、具体的にどのような身体接触が減少しているのかは分からない。

山口<sup>9)</sup>が大学生を対象に行った研究から、大きくなってからも不安やストレスは触れることで癒すことができるとしているように、子どもの成長と共に減少する身体接触があるとしても、早い段階で頻度が低下する身体接触があれば、子どもが大きくなっても行われる身体接触もあるのではないかと推測される。

乳幼児期は自立歩行の確立や、言葉の獲得、社会性の発達など子どもの成長が著しい時期であり、保育所や幼稚園への入園というような新しく生活の場が広がる時期でもある。子どもをとりまく環境が大きく変化する時期の子育てに身体接触を用いることは、子どもにとって、保護者にとっても意味あることなのではないかと考える。そこで、実際に子育てをしている保護者を対象に調査を行うことによって、保護者が感じている子育てにおける身体接触の意義や子どもの年齢における身体接触の特徴を明らかにしたいと考える。

鎌田<sup>10)</sup>が幼児期の親子を対象に行った研究では、幼児期における親子の身体接触は、起床時や食事時といった生活場面より、うれしそうなお時、怖がっている時などの情動場面においてよく行われることが明らかになっている。また、場面によっては子どもの性別で身体接触頻度に差があることも明らかになっている。

しかし、この調査は場面ごとに行われている身体接触の方法について具体的に明らかにするものではなく、各場面においてどのような身体接触が実際に行われているのかという疑問が残る。

以上のことから、本研究は幼児期に家庭で行われる親子の身体接触を対象に、親子の身体接触が行われる場面と身体接触方法の関係について、年齢に着目してその変化と特徴を明らかにすることを目的とする。

なお、今回の調査における身体接触とは、触れる部位や触れ方に関係なく、保護者が子どもの身体に触ることや子どもが保護者の身体に触ることのような身体同士の接触を身体接触と定義する。物を介した接触や視線のみのやりとりは身体接触に含まないこととする。

## II. 方法

### 1. 調査の概要

#### (1) 調査目的

身体接触がよく行われていることが明らかになった情動場面における親子の身体接触に着目し、発達の变化を明らかにすることを目的とする。また、保護者が身体接触を行う場面と方法の関係についても検討する。

#### (2) 調査方法・対象

子育て支援センターを利用している保護者104名及び私立幼稚園児の保護者314名合わせて418名（1歳72名、2歳56名、3歳63名、4歳70名、5歳96名、6歳61名）を対象に質問紙調査を行った。子どもの年齢に応じた親子の身体接触の特徴を明らかにすることを目的として、最近1～2か月間の子どもの関わりについて尋ねた。

#### (3) 調査時期

子どもが新しい環境に慣れ、心地よい気候の中で落ち着いて過ごしていると考えられる秋に調査を行った。子育て支援センターでは2017年10月16～20、11月18～22日の内の8日間調査を行い、その場で質問紙に記入してもらった。幼稚園は10月に質問紙の配布、回収を行った。きょうだいで園に通っている家庭には上の子どもの対象として質問紙に回答してもらった。

表1 親子の身体接触が行われる場面

親子の身体接触が行われる場面		
子どものポジティブな情動場面	子どものネガティブな情動場面	保護者から関わる場面
喜んでいる時	泣いている時	励ます時
充実感や満足感を得ている時	寂しそうな時	きずなを深める時
ほめてほしい時	怖がっている時	気持ちに寄り添いたい時

### 2. 質問紙

親子の身体接触は子どもの情動に変化があった時に

よく行われると考えた。Bridges<sup>11)</sup>は、乳児は未分化な興奮状態からまず不快、快の情動が生じ、続いて10か月頃までに怒り、嫌悪、恐れ、得意、愛などに分化するとし、Lewis<sup>12)</sup>は、乳児は誕生時に基本的情緒として満足、興味、苦痛をもち、誕生から6か月の間にそれぞれ喜び、驚き、悲しみ、嫌悪、怒り、恐れに分化するとしている。先行研究を参考に幼児の情動場面を作成し、ポジティブな情動とネガティブな情動の2つに分類した。加えて、子どもの情動に関係なく保護者主体で行われる身体接触もあると考え場面を作成した(表1)。

身体接触方法は、保育者の援助行為をかかわりの濃さという視点から直接的、間接的、接触なしの大きく3つに分類している栗原・佐々木の調査<sup>13)</sup>を参考にした(表2)。

各場面において身体接触を行うか尋ね、「とてもよく行う」(4点)～「全く行わない」(1点)の4件法で回答を求め、質問場面が当てはまらない場合には無回答とした。

また、それぞれの質問場面において「あまり行わない」「よく行う」「とてもよく行う」を選んだ人を対象に、どのような身体接触方法を行うか3つ以内で回答を求め、「よく行う」以上を選んだ人を対象に分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、質問紙の冒頭にて研究目的に同意できる方に回答求め、回答をもって倫理的な同意とした。

## III. 結果と考察

### 1. 場面に着目した身体接触頻度

子どもの年齢や性別、場面によって身体接触頻度が異なるかどうか、3要因の分散分析を行ったところ、身体接触場面と年齢と性別の交互作用が認められた( $F(40/2448) = 1.590, p < .05$ )。単純交互作用が認められ、かつ単純・単純主効果が認められた項目について多重比較を行った結果、以下の結果が得られた。

1歳男児において「泣いている時」「寂しい時」「きずなを深めたい時」が「喜んでいる時」より有意に多

表2 身体接触の方法

身体接触の種類			
	とても濃い身体接触	濃い身体接触	少し薄い身体接触
方法	だっこ・おんぶする	頭をなでる・ふれる	肩や背中にふれる
	抱きしめる	顔こふれる	ハイタッチする
		膝に乗せる	握手する
		手をつなぐ・握る	
		くすぐる	

く行われていることが明らかになり、1歳女児においては「喜んでいる時」「充実感や満足感を得ている時」「ほめてほしい時」「泣いている時」「怖がっている時」「きずなを深めたい時」「気持ちに寄り添いたい時」が「励ましたい時」より有意に多く行われていることが明らかになった。

また、1歳男児女児、2歳女児、5歳女児において「きずなを深めたい時」の身体接触が他の場面より多く行われていることが明らかになった。

1歳男児の保護者は1歳女児の保護者よりも「寂しそうな時」と「励ます時」に身体接触をよく行っていることも明らかになった。

## 2. 場面に着目した身体接触方法

場面ごとに行われる身体接触の方法の割合に差があるかを検証するため $\chi^2$ 検定を行ったところ、「喜んでいる時」は、「だっこ・おんぶする」が1歳においてよく行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 14.94, p < .05$ )。

「充実感や満足感を得ている時」は、「ハイタッチする」が6歳においてよく行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 23.40, p < .01$ )。

「ほめてほしい時」は、「抱きしめる」が5歳においてよく行われていること ( $\chi^2(5) = 17.21, p < .01$ )、「膝に乗せる」が6歳においてよく行われていること ( $\chi^2(5) = 13.62, p < .05$ )、「ハイタッチする」が4歳においてよく行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 15.60, p < .01$ )。

「泣いている時」は、「だっこ・おんぶする」が1歳と2歳においてよく行われていること ( $\chi^2(5) = 39.92, p < .01$ )、「抱きしめる」「顔にふれる」が5歳においてよく行われていること ( $\chi^2(5) = 26.15, p < .01$ ) ( $\chi^2(5) = 11.64, p < .01$ )、「手をつな

ぐ・握る」が6歳においてよく行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 16.65, p < .01$ )。

「寂しそうな時」は、「だっこ・おんぶする」が1歳と2歳において有意に多く行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 18.41, p < .01$ )。

「怖がっている時」は、「だっこ・おんぶする」が1歳と2歳においてよく行われていること ( $\chi^2(5) = 24.40, p < .01$ )、「手をつなぐ・握る」が6歳でよく行われていること ( $\chi^2(5) = 43.80, p < .01$ )、「肩や背中にふれる」が5歳でよく行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 15.65, p < .01$ )。

「励ます時」は、「膝に乗せる」が4歳においてよく行われていること ( $\chi^2(5) = 11.42, p < .05$ )、「肩や背中にふれる」が5歳においてよく行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 13.35, p < .05$ )。

各場面においてよく行われている身体接触方法について分析し、年齢ごとにどのような変化があるのか表3にまとめた。

## 3. 3場面に着目した身体接触頻度と方法

「子どものポジティブな情動場面」「子どものネガティブな情動場面」「保護者から関わる場面」の各場面における身体接触頻度が子どもの年齢や性別、場面によって異なるかを検証するために3要因の分散分析を行ったところ、場面の主効果のみが認められた ( $F(2/802) = 24.128, p < .01$ )。多重比較を行ったところ、「子どものポジティブな情動場面」と「子どものネガティブな情動場面」における身体接触が、「保護者から関わる場面」の身体接触より有意に多いことが明らかになった。

家庭での身体接触について自由記述してもらったところ、6歳の保護者の回答に「家の外での身体接触は減り、家での身体接触も友達には秘密のようです」と

表3 各場面で行われる身体接触方法の割合

場面	方法	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
喜んでいる時	だっこ・おんぶする	49.3*	27.1	26.3	20.6	29.8	27.8
充実感や満足感を得ている時	ハイタッチする	14.1	36.0	40.7	47.6	29.6	49.1**
ほめてほしい時	抱きしめる	50.7	69.1	70.0	75.8	79.5**	69.1
	ハイタッチする	12.7	29.1	36.7	37.9**	22.7	32.7
泣いている時	だっこ・おんぶする	86.1**	80.4**	54.2	58.3	50.6	41.7
	抱きしめる	52.8	74.5	74.6	78.3	87.7**	64.6
寂しそうな時	だっこ・おんぶする	75.0**	68.1**	47.5	57.8	43.2	47.1
怖がっている時	だっこ・おんぶする	78.0**	72.2**	56.7	59.4	48.8	40.0
励ます時	肩や背中にふれる	27.6	50.0	31.4	31.6	55.1*	37.7
きずなを深めたい時	抱きしめる	70.0	88.5*	83.6	85.0	69.5	73.6
気持ちに寄り添いたい時	手をつなぐ・握る	13.6	26.5	15.1	33.9	37.5**	41.2**

注. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表 4 3つの場面に着目した身体接触頻度と方法

	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
子どもの ポジティブな 情動場面	だっこ・おんぶする * (34.7)					
		抱きしめる (74.5)	抱きしめる (74.4)	抱きしめる (73.4)	抱きしめる (73.1)	
	頭をなでる・ふれる (76.7)	頭をなでる・ふれる (77.8)	頭をなでる・ふれる (81.3)			
		顔にふれる (22.9)			顔にふれる (20.9)	顔にふれる (21.7)
				手をつなぐ・握る ** (13.0)	手をつなぐ・握る ** (12.3)	手をつなぐ・握る (9.6)
			ハイタッチする ** (40.9)	ハイタッチする ** (42.7)		ハイタッチする ** (41.6)
子どもの ネガティブな 情動場面	だっこ・おんぶする ** (80.4)	だっこ・おんぶする ** (73.7)				
		抱きしめる (75.7)		抱きしめる (72.9)	抱きしめる ** (76.4)	
		頭をなでる・ふれる (30.3)	頭をなでる・ふれる (34.3)			
				顔にふれる (12.8)	顔にふれる (13.6)	顔にふれる (12.3)
				膝に乗せる ** (34.0)		膝に乗せる ** (33.8)
				手をつなぐ・握る ** (32.4)		手をつなぐ・握る ** (37.0)
			肩や背中にふれる (16.9)	肩や背中にふれる (14.4)	肩や背中にふれる ** (19.4)	肩や背中にふれる (14.9)
保護者から 関わる 場面	だっこ・おんぶする ** (43.9)	だっこ・おんぶする ** (46.0)				
		抱きしめる (69.8)	抱きしめる (68.6)	抱きしめる (67.6)		
			頭をなでる・ふれる * (40.9)	頭をなでる・ふれる (36.4)		
						顔にふれる * (24.2)
				膝に乗せる * (33.0)		
					手をつなぐ・握る ** (37.7)	手をつなぐ・握る ** (35.7)
		肩や背中にふれる (21.6)			肩や背中にふれる * (25.1)	
*p<.05, **p<.01 ( )内割合(%)						

いうものがあった。幼児期後期は保護者と身体接触をしたいが、人前で身体接触をすることは恥ずかしいという思いを抱く子もいることが分かる。

3つの場面ごとに身体接触方法について年齢によってどのような違いがあるか分析し、各場面において10%以上行われている方法について、最頻値の年齢、および最頻値-5%の範囲の年齢について表4にまとめた。

子どものポジティブな情動場面では、「だっこ・おんぶする」が1歳でよく行われていること ( $\chi^2(5) = 13.75, p < .01$ ), 「ハイタッチする」が3, 4, 6歳においてよく行われていることなどが明らかになっ

た ( $\chi^2(5) = 48.50, p < .01$ )。また、どの年齢においても「頭をなでる・ふれる」や「抱きしめる」がよく行われていることが分かる。

子どものネガティブな情動場面では、「だっこする・おんぶする」が1, 2歳でよく行われていること ( $\chi^2(5) = 79.94, p < .01$ ), 「膝に乗せる」「手をつなぐ・握る」が4, 6歳においてよく行われていることも明らかになった (順に  $\chi^2(5) = 22.48, p < .01$ ), ( $\chi^2(5) = 58.85, p < .01$ )。また、「抱きしめる」がよく行われていることも分かる。

保護者から関わる場面では、ネガティブな情動場面

と同じように「だっこする・おんぶする」が1, 2歳で有意に多く行われていることが明らかになった ( $\chi^2(5) = 20.71, p < .01$ )。また、「抱きしめる」や「だっこ・おんぶする」もよく行われていることが分かる。

どの場面においても「抱きしめる」は子どもの年齢に関わらず行われていることが分かる。

#### 4. 身体接触の行為者と被行為者

子どもが保護者に求めて行動を起こしている身体接触と、保護者が子どもに対して行動を起こしている身体接触のどちらが多いと思うか保護者に尋ねた。回答を「子どもから」「保護者から」の2つに分け、子どもの性別によって違いがあるか検証するために  $\chi^2$  検定を行った。その結果、「子どもから」は男児67.0%, 女児79.8%, 「保護者から」は男児33.0%, 女児20.2%であった。したがって、「子どもから」保護者に行く身体接触の割合は男児より女児の方が有意に高く、「保護者から」子どもに対して行う身体接触の割合は女児より男児の方が有意に高いことが認められた ( $\chi^2(1) = 8.08, p < .01$ )。

#### 5. 最近の身体接触頻度

幼児期から親子の身体接触が減少しているとする、今回の調査結果においても子どもの年齢が上がるにつれて「最近1,2か月の身体接触頻度が低下した」とする人が増加することが予想される。そこで、最近の身体接触頻度が子どもと関わる時間や子どもの自立度、身体接触の主動者とどのような関係にあるか相関分析によって検証した(表5)。その結果、男女共に最近の身体接触頻度と年齢の間に弱い有意な負の相関が認められた。このことから、男女共に年齢が上がると最近の身体接触頻度が低下する傾向にあると言える。幼児期は子どもが大きく成長し、社会性の発達や言葉の獲得も進む時期である。保護者が子どもに対して世話をする時に身体接触を用いる機会の減少や、子どもが自分で気持ちを整理できるようになったり、自

分の気持ちを言葉で伝えるようになったりすることで、親子の身体接触頻度が低下するのではないかと考えられる。

男女共に年齢が上がると最近の身体接触頻度が低下する傾向にあることが明らかになった一方で、場面ごとの身体接触頻度は男女共に年齢による違いはあまり認められておらず、特に幼児期後期は年齢による違いが認められない。そこで、身体接触方法について、親子のかかわりの濃さに着目して分析を行った。

子どもの年齢よって行われる親子の身体接触方法の割合に差があるかを検証するために  $\chi^2$  検定を行ったところ、有意な差が認められた ( $\chi^2(10) = 22.84, p < .05$ ), ( $\chi^2(10) = 52.97, p < .01$ ), ( $\chi^2(10) = 35.55, p < .01$ )。残差分析を行ったところ、ポジティブな情動場面では、6歳において「少し薄い身体接触」が19.6% (83方法) と他の年齢より有意に行われていることが明らかになった。

ネガティブな情動場面では、「とても濃い」身体接触が1歳で67.1% (245方法), 2歳において60.5% (227方法) と他の年齢より有意に多く行われていることが明らかになった。また、5歳において「少し薄い身体接触」が8.0% (48方法) 他の年齢より有意に多く行われていること、6歳において「濃い身体接触」が46.7% (172方法) 他の年齢より有意に行われていることも明らかになった。

保護者から関わる場面では、「とても濃い身体接触」が1歳で54.2% (162方法), 2歳において49.4% (161方法) と他の年齢より有意に多く行われていることが明らかになった。また、6歳において「濃い身体接触」が51.9% (193方法) 他の年齢より有意に行われていることも明らかになった。

したがって、どの場面においても幼児期後期になるにつれて以前よりも濃度の薄い身体接触が行われるようになる傾向にあることが明らかになった。つまり、子どもの年齢が上がると身体接触の頻度が低下する傾向は、保護者が、身体接触方法の濃度が低下すること

表5 親子の関わりと身体接触の関係性

		年齢	子どもと関わる時間	子どもの自立度	保護者からの身体接触	最近の身体接触頻度
男児	年齢					
	子どもと関わる時間	-.24**				
	子どもの自立度	.01	.03			
	保護者からの身体接触	.18**	-.00	-.06		
	最近の身体接触頻度	-.21**	.15**	-.04	.04	
女児	年齢					
	子どもと関わる時間	-.37**				
	子どもの自立度	.01	.14			
	保護者からの身体接触	-.03	.15*	-.02		
	最近の身体接触頻度	-.21**	.29**	.01	.07	

注. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

を親子の身体接触頻度が低下したと感ずることが要因の一つであると示唆される。

### 6. 3場面に着目した親子の身体接触

身体接触が行われる3つの場面ごとに親子の関わりと身体接触の関係性について相関分析を行った(表6)。その結果、男女児共に年齢が上がると最近の身体接触頻度が低下する傾向にあることが認められているが、男女児共にポジティブな情動場面における身体接触頻度が高い人は最近の身体接触頻度が高い傾向にあることが明らかになった。また男児に着目すると、保護者から関わる場面における身体接触頻度と子どもの年齢の間に弱い正の相関がみられた。女兒に着目すると、ポジティブな情動場面における身体接触頻度と子どもと関わる時間の間には弱い正の相関が認められた。

したがって、男児においては幼児期後期になるほど、保護者から関わる場面の身体接触頻度が高い傾向にあることが示された。また、女兒はポジティブな情動場面における身体接触頻度と子どもと関わる時間に関連が示された。さらに、男女共にポジティブな情動場面における身体接触頻度が高い人ほど最近の身体接触頻度が高い傾向にあることも示された。

## IV. 総合考察

### 1. 身体接触頻度に着目して

1歳男児は、子どものネガティブな情動場面「泣いている時」「寂しそうな時」と保護者から関わる場面「きずなを深めたい時」が子どものポジティブな情動「喜んでいる時」より有意に多く身体接触が行われていることが明らかになった。1歳女兒は、子どものポジティブな情動「喜んでいる時」「ほめてほしい時」「充実感や満足感を得ている時」と子どものネガティブな情動場面「泣いている時」「怖がっている時」、保護者から

関わる場面「きずなを深めたい時」「気持ちに寄り添いたい時」が保護者から関わる場面「励ましたい時」より有意に多く行われていることが明らかになった。

また、2～5歳女兒は、子どものポジティブな情動「ほめてほしい時」の身体接触が他のいくつかの場面よりも有意に多いことも明らかになった。

さらに、子どものポジティブな情動場面の身体接触頻度と最近の身体接触頻度の間にも正の相関が認められ、高野<sup>14)</sup>のように、保護者は子どもと関わる中で子どものポジティブな情動に共感、共振しようとしていると考えられる。

### 2. 身体接触方法に着目して

とても濃い身体接触である「だっこ・おんぶする」は、子どものポジティブな情動「喜んでいる時」の1歳や子どものネガティブな情動場面「泣いている時」「寂しそうな時」「怖がっている時」の1、2歳などの乳幼児期によく行われていることが明らかになった。濃い身体接触「手をつなぐ・握る」は保護者から関わる場面「きずなを深めたい時」の5歳や「気持ちに寄り添いたい時」の5、6歳、子どものネガティブな情動場面「泣いている時」「怖がっている時」の6歳などの幼児期後期によく行われていることが明らかになった。

また、子どものポジティブな情動場面における身体接触方法では、どの年齢においても、とても濃い身体接触「抱きしめる」がよく行われていることや、1～3歳頃は濃い身体接触「頭をなでる・ふれる」が好まれて行われ、3歳以降は少し薄い身体接触の「ハイタッチする」が好まれて行われていることが明らかになった。

ハイタッチに関して、例えばスポーツの場面においては、得点や勝利が決まった時にチームメイトとハイタッチやハグをする姿が見られる。NBAのチームを対象に行われた研究<sup>15)</sup>に、プレーを喜んでいる時のハイタッチやハグ、肩を組む、拳をぶつけるなどの短時間での喜び合いの身体接触が、選手に協調性を築く

表6 場面に着目した親子の関わりと身体接触の関係性

		子どもの ポジティブな情動場面 における身体接触頻度	子どもの ネガティブな情動場面 における身体接触頻度	保護者から関わる場面 における身体接触頻度
男児	子どもの年齢	.02	.05	.29**
	子どもの自立度	.12	.16*	.14*
	子どもと関わる時間	.08	-.01	-.09
	身体接触の主体	.09	.06	.02
	最近の身体接触頻度	.24**	.11	.04
女兒	子どもの年齢	-.13	-.01	.06
	子どもの自立度	-.06	-.09	-.08
	子どもと関わる時間	.21**	.01	.07
	保護者からの身体接触	.18*	.08	.05
	最近の身体接触頻度	.25**	.16*	.20**

注. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

ことを通じて個人とチームの成績を上げることを示唆したものがある。子どもの場合も、ポジティブな情動場面においてハイタッチが他の場面よりも好まれて行われていることは、NBAのチームを対象に行われた研究と同様に、ポジティブな情動場面において喜び合いの共感的表現として、短時間で行うことのできる動的な身体接触が適すると考えられる。

一方、子どものネガティブな情動場面では、1, 2歳でとても濃い身体接触「だっこ・おんぶする」がよく行われ、どの年齢でもとても濃い身体接触「抱きしめる」がよく行われていること、3歳以降で濃い身体接触「手をつなぐ・握る」、少し薄い身体接触「肩や背中にふれる」も行われることが明らかになった。つまり、子どものネガティブな情動場面では、ゆっくりと親子の関わりをもち、長い時間身体を密着させる身体接触方法が他の場面よりも好まれて行われていると考えられる。

保護者から関わる場面では、とても濃い身体接触である「だっこ・おんぶする」「抱きしめる」、濃い身体接触の「手をつなぐ・握る」などがよく行われていることが分かる。親子で一緒に時間を過ごし、楽しさを共有していると感じられる関わりがよく行われていると考えられる。

山口は大学生を対象に行った調査<sup>16)</sup>において、腕よりも肩の接触到に落ち着いた、励まされたといった気分を感じることを明らかにしている。幼児でも子どものネガティブな情動場面と保護者から関わる場面において、子どものポジティブな情動場面よりも「肩や背中にふれる」が多く行われていることが分かった。

### 3. 性差に着目して

情動場面における身体接触頻度に限定して調査したところ、身体接触頻度に性差はないこと、女兒は自分から保護者に対して身体接触を求める傾向にあることが明らかになった。つまり、女兒は自分から保護者に対して身体接触を求める行動を起こし、男児は主体的に身体接触を求めるよりも、保護者から能動的に受ける身体接触が多いといえる。

## V. 今後の課題

今回の調査は保護者の回答を基に身体接触の特徴について明らかにするものである。今後実際に有効な場面や方法について検証する必要があるだろう。また、母親と父親で回答に差が見られなかったことから保護者の性差については考慮しなかった。しかし、浜崎らの研究<sup>17)</sup>においては、父親の方が身体接触到に遊びの要素が多いことを明らかにしているため、身体接触場面を増やして調査を行うことで新しい知見が得られるのではないかと考える。また調査時期が10, 11月と短

い期間であることから、他の時期での調査や追跡調査の実施により、さらに詳細な特徴を明らかにすることができるのではないかと考える。

今回の調査から、「子どもから」求める身体接触は男児より女兒の方が有意に高く、「保護者から」行う身体接触は女兒より男児の方が有意に高いことが明らかになった。この結果に関連した研究としては、山口らが大学生を対象に幼少期における両親からの身体接触量を想起してもらった調査<sup>18)</sup>を実施しており、男児より女兒の身体接触量が多かった傾向がみられている。山口が母親を対象に乳児期に行った身体接触量を想起してもらった調査<sup>19)</sup>では性差がみられていない。

さらに、君塚ら<sup>20)</sup>は身体接触イメージが気分及びぼす影響を調査しているが、受動的に身体接触を受けたことをイメージした群では不安緊張が軽減し、能動的に身体接触をしたことをイメージした群では不安緊張、怒り、疲労が軽減し、活気が出ることを明らかにしている。

今後、保護者が行っている身体接触と子どもの記憶に残っている身体接触の関係や身体接触の行為者・被行為者について研究を進めていくことで、親子の身体接触についてさらに知見を深めることができると考える。

## 引用文献

- 1) Harlow, H. F. (1987) 愛のなりたち (浜田寿美男, 訳). ミネルヴァ書房. 34-38. (Harlow, H. F. (1971) *Learning to Love*. San Francisco : Albion Publishing Company.)
- 2) 篠沢薫 (2007) ベビーマッサージにおける親子間の関わりが発達的研究. 根ヶ山光一 (編). 対人関係基盤としての「身体接触」に関する生涯発達行動学的検討. 11-16
- 3) 山口創 (2003) 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響. 健康心理学研究. Vol.16. No.2. 60-67
- 4) 山口創・山本春義・春木豊 (2000) 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連. 健康心理学研究 Vol.13. No.2. 19-28
- 5) 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある. 光文社. 73-74
- 6) 鈴木晶夫・春木豊 (1989) 対人接触に関する試験的研究. 早稲田心理学年報. 第21巻. 93-98
- 7) 阿部麻耶・秦野悦子 (2015) 幼児の接近・接触行動における対象との関係—アタッチメントとコンパニオンシップの観点から—. 教育心理学会. 697
- 8) 藤田清澄 (2011) 遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味—身体知の視点から—. 保育学研究第49巻第1号. 29-39
- 9) 山口創 (2010) 身体接触が不安に及ぼす影響—触

- 覚抵抗との関連一. 桜美林論考. 心理・教育学研究 (1). 123-132
- 10) 鎌田桃代 (2017) 保護者の乳幼児に対する身体接触に関する調査結果. 愛知教育大学幼児教育研究 2017第19号. 29 - 37
  - 11) Bridges KMB (1932) Emotional development in early infancy. Child Development 3. 324-334
  - 12) Lewis, M. (2010) The Emergence of Human Emotions. Lewis, M. Haviland-Jones, J. M. & Barrett, L. F. Handbook of Emotions Third Edition. The Guilford Press. 304-319
  - 13) 栗原ひとみ・佐々木宏之 (2016) 「保育者の寄り添う技術を可視化する～5歳児M児(女児)が仲間に入れてもらえない場面事例から～」. 保育の実践と研究第21巻第3号. スペース新社保育研究室. 40-52
  - 14) 高野牧子 (2010) 幼児期の感情表現および意識的な身体表現による母子間のコミュニケーション. 山梨県立大学人間福祉学部紀要5. 17-34
  - 15) M. W. Kraus, C. Huang, and D. Keltner (2010) Tactile communication, cooperation and performance: an ethological study of the NBA. Emotion 10. 745-749.
  - 16) 山口創 (2007) 身体接触が気分には及ぼす影響—幼少期の身体接触との関連. 家族問題相談研究(5). 聖徳大学家族問題相談センター. 21-26
  - 17) 浜崎隆司・森野美央・田口雅徳 (2008) 幼児期におけるスキンシップと養育態度との関連. 幼年教育研究年報30. 23-31
  - 18) 前掲 (4)
  - 19) 前掲 (3)
  - 20) 君塚拓哉・阿部宏徳 (2019) 接触イメージが気分には及ぼす影響. 東京成徳大学心理学研究19号. 69-76

(2020年9月24日受理)